

日常性と非日常性の交わりで

—— 跡見学園女子大学『観光コミュニティ学部紀要』創刊によせて ——

Foreword

—— At the Intersection of Ordinaries and Extraordinaries of Life ——

観光コミュニティ学部の新設に続いて、紀要創刊の運びとなったことを心からお慶び申しあげる。ここにいたるまでの山田徹雄学長、小川功学部長はじめ関係各位のご尽力に深い敬意を表する。また、この創刊号に寄稿を求められたことをこの上ない光栄に思う。新学部創設をいささかお手伝いした者として、あらためて新学部への期待を述べて、お祝いの言葉とさせていただきたい。

新学部の独自性は、相隔たっているかに見えるコミュニティと観光という両分野を、方法的に隣接分野として位置づけたことにあろう。コミュニティデザインと観光デザインの両学科は、観光コミュニティ学部という新しい教育・研究コミュニティを構成するサブコミュニティとしてデザインされた。それでは、このデザインはどのような基本構想により描きだされたのか。これに焦点を当てて、以下、私論を述べてみたい。

観光コミュニティ学部の問題関心が向かうのは、何よりも日常性と非日常性との複雑な相互作用であろう。人はまず、家族形成によって持続的な生活空間を創りだす。この血縁的生活空間の持続性は、家族空間の地縁的集合体であるコミュニティの形成によって一次的に保障される。コミュニティにより地域化された生活空間の持続性は、住民に日常性として意識される。ところが、この日常性は大小を問わずこれに断絶をもたらす非日常性と絶えず交錯しており、両者は相互移行・反転関係にさえある。

ここでいう非日常性とはなにか？それは、周期的にまたは「忘れた頃に」やってくる天災や、政治・経済環境の激変による難民の殺到や人口の急減ばかりでない。四季折々の祭りや何年も隔てて催される周年行事も、ときに住民に対する共同体強制をとめないながら、日常性（け）の流れを堰きとめる非日常性（はれ）として意識される。

ところで、家族的生活空間の持続性を一次的に保障するコミュニティも、自己の持続可能性の保障のために、隣接のコミュニティと相互依存関係に入らざるをえない。これまた、非日常性を生む要因となる。なぜならば、隣接コミュニティとの共生は、必然的に隣接コミュニティの隣接コミュニティとの間接共生をもたらし、かくて関係性の連鎖反応による生活空間の広域化、多層化につれて日常性が薄れてゆく遠近関係を生みだすからである。そのため、遠隔コミュニティの住民相互の偶発的接触は、双方にとり非日常性として意識される。「朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや」は、日常性が非日常性と交錯するときの生活感情の高揚を示す好例であろう。この言葉が、「朋あり、遠方に往かむ」という朋側の意志を基因としていることはいうまでもない。

この「遠来の朋」という観念がすでに、人は受動的に、ときには意志に反して非日常性に向きあわされるだけでなく、意志的行為として日常的生活空間の外に踏みでる存在であることを含意している。住むことと旅することはともに人間の本性なのだ。人が折々に非日常性を求めて住民から旅人に変身する自発的行為、これこそ本来の「観光」というものであろう。その対象となる非日常性とは、実は他コミュニティの日常性にほかならない。人、家族がそれぞれ個性、家風を持つように、地域の原単位であるコミュニティの生活様式もまた、風土的与件と闘い、これを活しながら代々の住民が築きあげてきた、かけがえのない歴史的個性を具えている。これは住民にとり日常性そのものであるが、非住民にとっては非日常性である。本来の観光資源とはまさにこれにほかならず、これこそかけがえのない「旅情」をそそってくれるものなのだ。

あるコミュニティの日常性が他のコミュニティにとり非日常性となりうることは、日常性に非日常性という交換価値を生む。そのため、コミュニティが相互に日常性を交換しあう市場の形成は必至である。かくして成立した観光市場の急成長は、観光の産業化をもたらし、経済構造に新しい相貌を生むにいたった。とはいえ、日常性と非日常性と

の交わりを介したコミュニティ間関係こそ観光の原点であることを、見落としてなるまい。潮風が吹きわたる鄙びた漁港の埠頭に立つ朝市や、中世以来の石畳のゲマインデ広場で開かれる土曜市が、地元民ばかりでなく他地域からの客で賑わう情景こそ、観光の原風景というべきものである。市（いち）は売り手と買い手の相互信頼にもとづく対等関係により、初めて持続可能となる。観光業が茶道に昇華された主の「もてなし」と客の「たしなみ」の市場倫理を欠くならば、持続不可能な虚業に終わるであろう。

ここまで考察を進めてくると、観光とは実はコミュニティ内関係でもありうることに気づく。人が旅人として外に向かう存在であるならば、旅人の眼を内に向けることもできるはずである。それは、住みなれた生活空間の日常性なものが、実は非日常性の新陳代謝の連続にほかならないことに気づかせてくれるであろう。日常性とは、無変化の連続ではない。一見変り映えのしない日常生活においても、人は日々新たなものを、すなわち非日常性を、それと気づかぬまま体験している。しかし、この非日常性は遅かれ早かれ日常化し、ますます意識の下に沈みこんでゆく。日常性とは、たえざる非日常性の日常化という動的均衡にほかならない。これの認識が難しいのは、太陽や月の連続的移動を人の眼が認識できないのと似ている。連続のなかに不連続を見出すために、人はなんらかの方法を必要とする。空間的に連続する変化を認識するために、時間的断絶をおくのが有効であるように、時間的に連続する変化を認識するためには、空間的断絶をおくことが有効である。遠い旅から戻ってきた者が、旅装を解かないままの眼を己の生活空間に向けたとき、見慣れたはずの日常性が一瞬ふだんと違う表情を見せることを体験した人は、少なくないであろう。他郷への観光という迂回を通して、人は日常的生活空間のなかに非日常性を見出す自己観光への旅に誘われるのである。

ここまでは住民個人の自由な行為である。しかし、コミュニティもまた内への旅に出なければならない。観光客、すなわち余所者の眼をもってコミュニティの日常性の表層に非日常性を炙りだし、コミュニティが直面する諸問題の総点検を住民の共同行為として組織的かつ日常的に行う努力が、コミュニティの存続のために必須となるからだ。諸コミュニティは相互依存の関係にあるだけでなく、住民構成の最適化と企業誘致をめぐる熾烈な競合関係にもある。一コミュニティの住民数の社会減とは、他コミュニティの社会増にほかならない。このコミュニティ間競争に後れをとると、他コミュニティによる吸収合併を甘受しなければならない。EUが補完性原則にもとづく地域支援にあたり、補助金を申請する地域に厳密なSWOT分析を条件づけることは、かかる問題状況を浮きぼりにする。コミュニティに内在する可能性と問題点の、旅人の眼をもってする絶えざる自己点検は、コミュニティの存続をかけた住民の共同行為なのだ。これこそコミュニティデザインの固有の課題というべきであろう。

本紀要が観光コミュニティ学部という新生のコミュニティの日常的活動の自己点検の場として、広く学外からも関心と呼ぶ学問的定期市となることを願ってやまない。

渡 邊 尚
(京都大学名誉教授)